修士論文（要旨）
2014年1月

日本語教育を志向しない学生による日本語ボランティア
−インタビュー結果の質的分析を通して−

指導　齋藤伸子　教授

言語教育研究科
日本語教育専攻
211J3018
中牟田隆太郎

目次

第１章　はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

1.1　研究背景・・1

1.2　研究目的・・1

第２章　先行研究 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

2.1.　地域の日本語教室に関する研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

2.2.　大学生とボランティア活動に関する研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

2.3.　大学生と日本語ボランティアに関する報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

第３章　調査概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

3.1.　研究方法・・6

3.2.　調査対象・・7

3.3.　調査方法・・7

3.4.　分析方法・・8

第４章　各活動場所の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

4.1.A 教室 ・・・9

4.2.B 教室　・・10

4.3.　クラスゲスト ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

第５章　分析結果：院生Ｋ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

第６章　分析結果：学生Ｍ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29

第７章　分析結果：学生Ｈ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45

第８章　考察　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61

第９章　まとめと今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・65

参考文献・参考ウェブサイト

第１章　はじめに

現在、日本国内の日本語教育を支えているのは、地域の日本語教室であり、そこに参加するボランティアである。様々な人がボランティアとして参加している中で、多くの大学生、大学院生が参加している。本研究では、その学生ボランティアの中でも日本語教育を志向しない学生に焦点をあて、彼らの経験の理解を通して、よりよい日本語教室や支援活動を作っていく一助とすることを目的とする。

第２章　先行研究

第３章　調査概要

本研究では、質的研究法のひとつであるケース・スタディをアプローチとして採用する。研究対象は、別々の教室、活動に参加する院生Ｋ(以下Ｋ)、学生Ｍ(以下Ｍ)、学生Ｈ(以下Ｈ)の３名である。また、得られたインタビュー文字化資料は、佐藤(2008)の質的データ分析法を参考に行った。

第４章　各活動場所の概要

Ｋの参加するＡ教室は、ミャンマー人を主な対象とした教室で、年少者支援、成人学習者支援の２つを行っている。Ｍの参加するＢ教室は、地域の高校とNPO、大学が協働して運営され、海外につながる生徒を対象にしている。Ｈの参加するクラスゲストは、０大学で行われている留学生の学習支援を行う制度である。

第５章～第７章　分析結果：院生Ｋ、学生Ｍ、学生Ｈ

３名の研究協力者のインタビュー結果から得られた語りを分類し、記述を行った。

第８章　考察

第５章から第７章で記述した中で、３つの共通・類似点と相違点について考察を行った。

まず、「日本語を教える責任」に関して、ＫとＭは言及をしなかったことに対して、Ｈは責任があると主張する相違点があった。これは、学生たち自身が、ボランティアの役割を学習者の「学習のサポーター」と捉えるか「日本語を教える人間」と捉えるかで得られる違いであり、「日本語を教える人間」と捉えていたＨは、学習者に「正しい日本語を教えなければならない」と考えていた。次に、「活動を運営している組織へ関わり方」では、組織に深く関わるかどうかで、活動に関する興味関心や問題意識に大きな違いが現れていた。深く関わって活動していたＫのインタビューからは、多岐にわたる項目において言及がなされた。３つ目の「活動を負担に感じた経験の有無」では、「感じたことがある」と話した学生は、共通して、活動参加当初に自分自身に有能感を持っていたと考えられる。

第９章　まとめと今後の課題

本研究では、学生ボランティアが活動を運営する組織とどのように関わっているかで、彼らが活動の何に興味関心や問題意識を持つか異なることがわかった。しかし、地域日本語教育に関して行われた研究や報告の成果は反映されておらず、今後、各教室や活動を運営する人間が学生たちを含めたボランティアたちを啓発していく必要がある。さらに、他の参加者の視点を加えて、より広い枠組みで学生ボランティアを見ていくことが今後の課題である。

参考文献

安藤淑子(2007)「大学の地域貢献における学生ボランティア活動の評価と位置付け」山梨県立大学国際政策学部紀要,No.2,pp.7-15

ジェイムズ・ホルスタイン、ジェイバー・グブリアム(2009)『アクティヴ・インタビューー相互行為としての社会調査』せりか書房

杉原由美(2012)「日本語プログラムが創る多言語多文化共生学習の可能性―留学生日本語授業『クラスゲスト』の応募動機に注目して―」OBIRIN TODAY,第 12 号,pp.111-126

野山広・山辺真理子・籏野智紀・河北祐子・宮崎妙子・伊藤祐郎・久保井康典(2009)「地域日本語教室の 5 つの機能と研修プログラム - 豊かな学びと人間関係づくりを目指して - 」シリーズ多言語・多文化協同実践研究,No.10,pp.60-106

久野弓枝(2002)「地域日本語ボランティア教室の限界と可能性」北海道大学大学院教育学研究科紀要(86),pp.251-264

松岡洋子・宮本律子(2002)「地域の日本語教室のための人材育成」秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要,第 24 号

水野かほる(2012)「日本語ボランティア活動を通じて大学生は何を学ぶのか-活動報告の分析から-」国際関係・比較文化研究,第 10 巻,第 2 号,pp.193-207

水野かほる(2007)「学校現場における日本語教育ボランティア支援活動-２年間の取り組みの成果と課題-」国際関係・比較文化研究,第 6 巻,第 1 号,pp.201-217

水野かほる・澤崎宏一(2006)「学校現場に置ける静岡県立大学生のボランティア支援活動」国際関係・比較文化研究,第 4 巻,第 2 号,pp.241-261

森本郁代(2001)「地域日本語教育の批判的な再検討・ボランティアの語りに見られるカテゴリー化を通して」野呂香代子・山下仁(編)『正しさへの問い-批判的社会言語学の試み-』三元社,pp.215-247

山崎由紀子・金久保紀子(2010)「つくば市在住外国人に対する日本語支援状況」筑波学院大学紀要第 5 集,pp.131-140

ヤン・ジョンヨン(2012)「地域日本語教育は何を「教育」するのか-国の政策と日本語教育と定住外国人の三者の視点から-」『地域日本語研究』(高崎経済大学地域政策学会) 第 14 巻,第 2・3 合併号,pp.37-48

吉田秀夫・大東貢生・田中滋・福田菊(2004)「ボランティア団体のニーズと大学生の意識との間の乖離」国際社会文化研究所紀要、第 6 号

S.B.メリアム・E.L.シンプソン(2010)『調査研究法ガイドブック-教育における調査のデザインと実施・報告-』ミネルヴァ書房

T.A.シュワント(2009)『質的研究用語辞典』北大路書房

参考ウェブサイト

文化庁　平成 24 年度国内の日本語教育の概要（最終検索 2013/12/30）
http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/jittaichousa/h24/gaiyou.html

法務省　平成 24 年末現在における在留外国人数について（速報値）（最終検索 2013/12/30）
http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00030.html